名勝旧大乗院庭園発掘調査
現地説明会資料

2000.03.04（財）日本ナショナルトラスト
奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

大乗院庭園とは

大乗院は一乗院とならぶ興福寺の院家の一つです。藤原氏の氏寺である興福寺には、平安時代以降には氏長者（一族の代表者）の子供や兄弟が僧として高い地位につきました。彼らが住んだ家を院家と呼んでいます。この庭につくられた庭園が大乗院庭園です。庭園は東の大池と西の小池を中心につくられ、南都随一の名園として多くの人々にたたえられてきました。

大乗院と大乗院庭園の歴史

平安時代

大乗院は 1096 年に開かれました。初めは今の奈良県庁の位置にありましたが、1180 年に平重衡の東大寺・興福寺焼き打ち後、元興寺の寺域であった今の場所に移転しました。

鎌倉時代

寝殿造の屋敷が池の西側に建っていたことが史料で知られています

室町時代

尋尊大僧正が活躍し,大変栄えました。この頃庭師として有名だった善阿弥を京都から招き、庭園を改造しました。善阿弥は将軍のいた室町殿（花御所）や銀閣寺で有名な東山殿（慈照寺）の庭づくりに関係したと考えられています。

江戸時代

奈良国立博物館の横に移築保存されている茶室の含翠亭が建てられました。また、隆温大僧正の筆によるといわれている「大乗院四季真景図」が描かれ、美しい庭園の姿を見ることができます。

明治時代以降

明治初めの廃仏毀釈の影響で庭園は放棄され、だんだん荒れ果てていきました。北側に奈良ホテルが開業し、庭園の一部はテニスコートやミニゴルフ場になり、東側は県道の拡幅で削られてしまいました。

そして最近では…

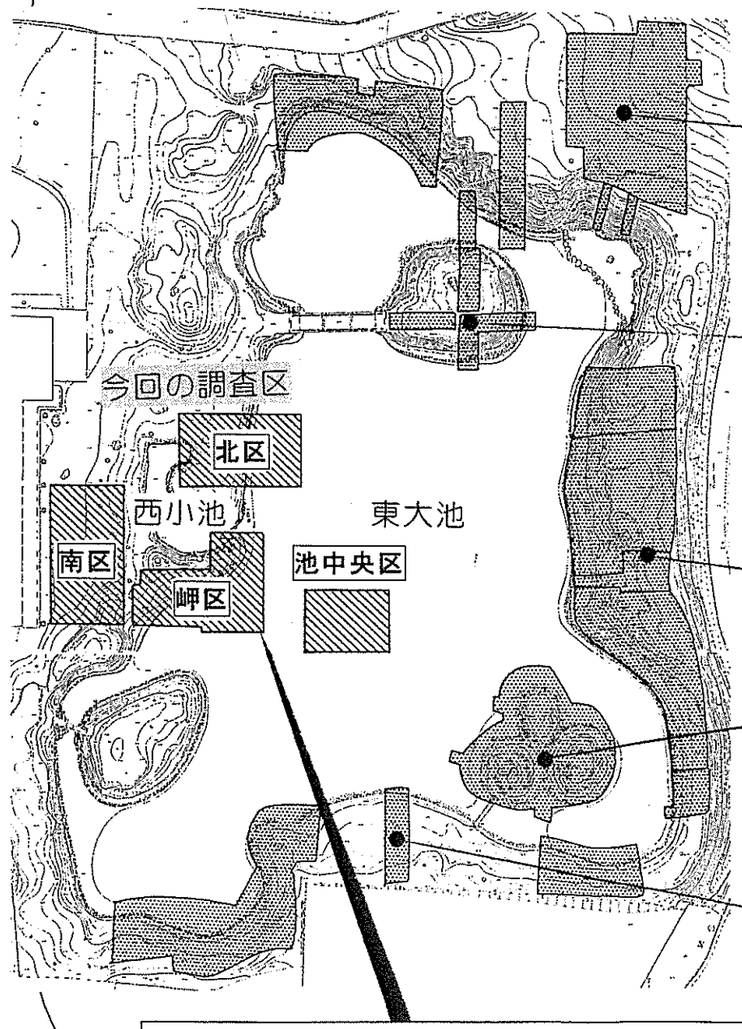
保存運動の結果、国の名勝に指定され、整備がおこなわれました。また、南側に大乗院庭園文化館が開館し、発掘調査をもとにした庭園の整備も進んでいます。

大乗院庭園の研究

大乗院については数多くの史料があり、様々な研究がおこなわれています。庭園については森蘊氏(もりおさむ:1905-1988)が史料や現地調査の成果をもとに庭園の復原や、その意義について数多くの研究を生み出しました。発掘調査はこの復原との比較をおこないながら進めています。

大乗院庭園の発掘調査

大乗院庭園の発掘調査は 1990 年より(財)日本ナショナルトラストによる保存整備事業の一環として奈良国立文化財研究所がおこなっています。今回までの調査で次のようなことがわかってきました。



東大池北岸の陸部分は近代に土が盛られて大きく変化しています。昭和初年にはミニゴルフ場もつくられ、その跡が発掘で明らかになりました。

北中島は地山を削ってつくった基礎に、土を盛り上げてつくっています。この盛土の下から池が造られる以前と考えられる土器が出土しました。

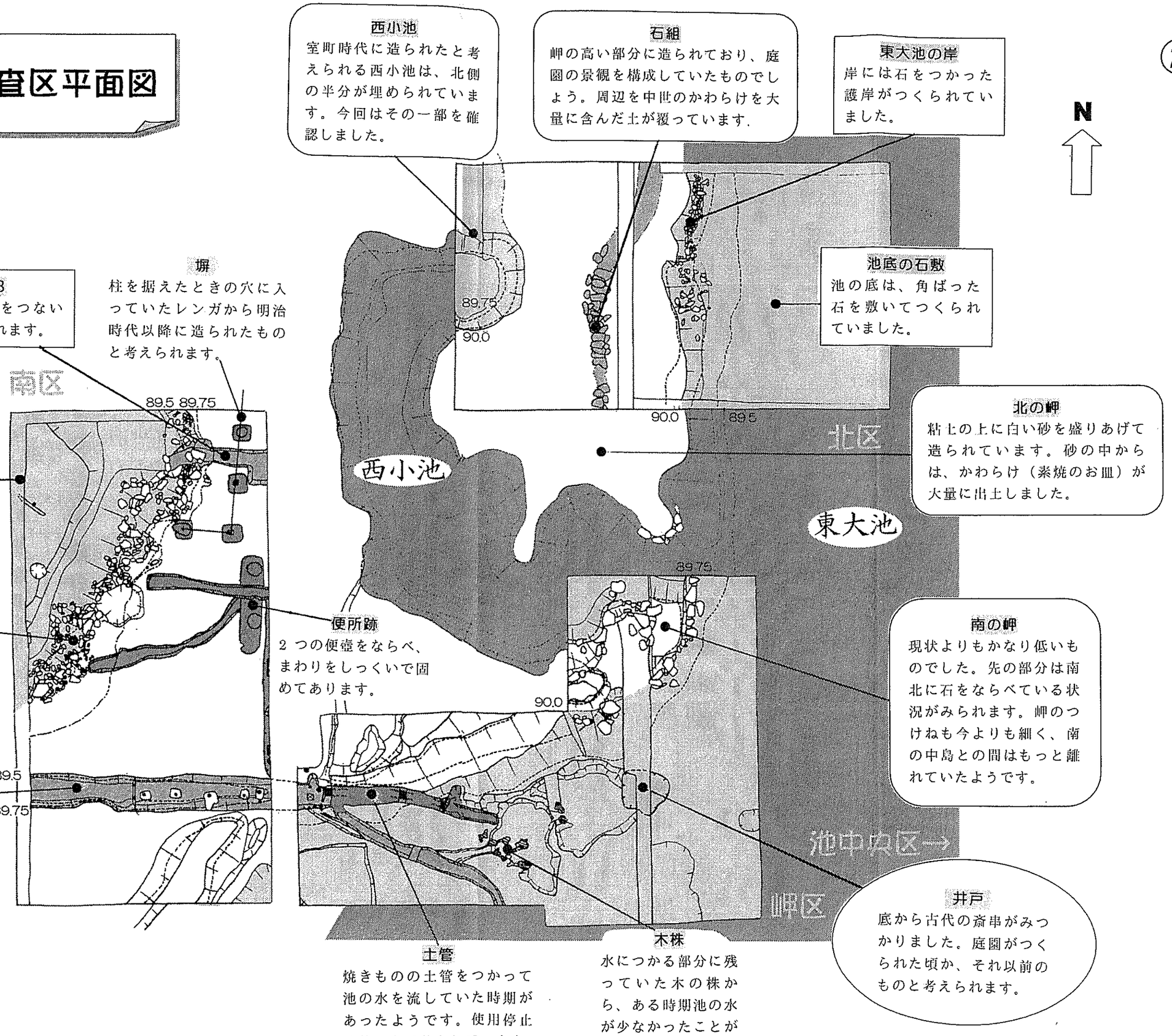
東大池東岸は中世・近世の庭園の状態を比較的良好に残しているようです

「真景図」にも描かれている三ツ中島は江戸時代につくられたものであることがわかりました。

東大池南岸は池が作られた時は自然の地形を利用したものであったようですが、中世以降急勾配の護岸に作り直されていることがわかりました。

今回は大乗院の中心的な建物があったと考えられる東大池の西岸と西小池の周辺を中心に調査することとしました。また、尋尊が文明 17 年(1485)4 月 1 日条に記した井戸の存在についても調べることとし、1 月より調査を始めました。

今回の調査区平面図



西小池
室町時代に造られたと考えられる西小池は、北側の半分が埋められています。今回はその一部を確認しました。

石組
岬の高い部分に造られており、庭園の景観を構成していたものでしょう。周辺を中世のかわらけを大量に含んだ土が覆っています。

東大池の岸
岸には石をつかった護岸がつくられていました。

池底の石敷
池の底は、角ばった石を敷いてつくられていました。

北の岬
粘土の上に白い砂を盛りあげて造られています。砂の中からは、かわらけ（素焼のお皿）が大量に出土しました。

南の岬
現状よりもかなり低いものでした。先の部分は南北に石をならべている状況がみられます。岬のつけねも今よりも細く、南の中島との間はもっと離れていたようです。

井戸
底から古代の斎串がみつかりました。庭園がつくられた頃か、それ以前のものと考えられます。

東西溝B
西小池と拡張部をつないでいた溝とみられます。

塀
柱を据えたときの穴に入っていたレンガから明治時代以降に造られたものと考えられます。

近代の建物跡
コンクリートの基礎が残っていました。奈良ホテルが開業し、テニスコートやミニゴルフ場があった頃のものでしょう。

西小池の岸
江戸時代に南にひろげられた西小池の岸と考えられます。推定されている池の位置より大きく北にずれていることがわかりました。

東西溝A
初めは深く掘られ、池の水を西側の尾花谷川に流すためのものと考えられます。のちに深さの半分まで埋め戻され、木の杭が据えられています。

便所跡
2 つの便壺をならべ、まわりをしっくいで固めてあります。

土管
焼きものの土管をつかって池の水を流していた時期があったようです。使用停止の後、木で蓋をしています。

木株
水につかる部分に残っていた木の株から、ある時期池の水が少なかったことがわかります。

出土遺物あれこれ

瓦

飛鳥時代にさかのぼる重弧文軒平瓦、奈良時代の東大寺式軒平瓦といった古代のものから、中世、近世、最近の瓦まで様々な瓦が出土しました

斎串（いぐし）

罪や病気等を清める「はらえ（祓）」のまじないに用いられた道具です。古代のものと考えられます。

かわらけ

中世に用いられた素焼きのお皿です。南北２つの岬の盛土の中に大量に含まれていました

レンガ

コンクリートと共に近代建物に使用されていたものです。中には文字が刻印されたものもあります。

パター

ゴルフで使われるパターの先です。昭和の初めにできたミニゴルフ場と関係するものでしょうか？？？

大乗院を知るための 重要人物

尋尊（じんそん）

1430年８月生
1508年５月没
興福寺百八十世別当。大乗院第二十代門跡。お父さんは「無双の才人」と評され、文化活動に優れた活躍をみせた関白の一条兼良です。尋尊は長谷寺、橘寺、薬師寺の別当も兼務し、大乗院を繁栄させました。庭園についても広い知識をもち、善阿弥を京都から呼び、大乗院庭園を完成させました。日記が「大乗院寺社雑事記」に収められ、この時期の社会の状況を知る上で貴重な史料となっています。

善阿弥（ぜんあみ）

生没年不明
身分が低いとされていた河原者とよばれる人々でしたが、庭造りにすぐれ、時の将軍足利義政に重用されました。将軍の御殿である室町殿（花御所）、内裏学問所などの庭を造ったといわれていますが、どのような庭をつくったのかはっきりとしたことはわかっていません。息子の小四郎も大乗院庭園を改造したことが史料から知られています。

大乗院四季真景図（森家蔵）

調査区付近拡大図

現場や周りの風景とくらべてみよう！

今回の調査でわかったこと

北区の岬の上にある石組は「真景図」に描かれた大きな石に関係するものと考えられます。つくられた時期は不明ですが、石組の周囲を埋めているかわらけの年代から考えると善阿弥によりつくられたものである可能性もあります。

江戸時代の西小池の東岸は今までの推定よりも大きく北西にずれることがわかりました。そのため、周辺の今までの復原案との違いがはっきりしてきました。西小池の位置や大きさについては考え直す必要があります。

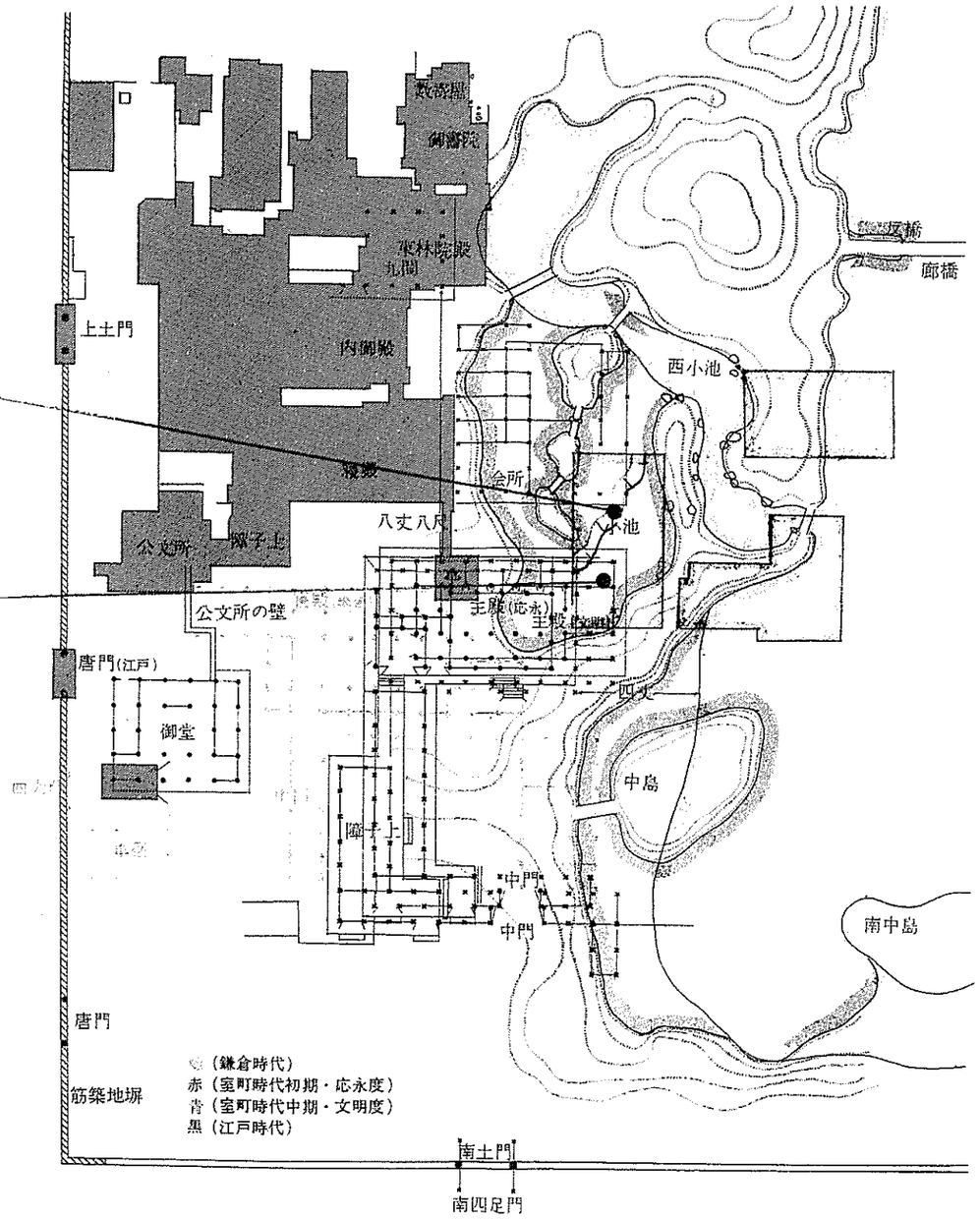
森蘊氏の復原案では東西溝Ａについては想定されていませんでした。ところが、「真景図」にはこの溝にあたる可能性のある水路が描かれています。調査された溝の状況から考えると、初め池の水を抜くために西側の尾花谷川に向けて掘られていたものを、江戸時代に西小池を広げる時に、東大池と西小池を結ぶ水路として庭園の一部に取り込んで利用したものではないかと考えられます.

昨年までの調査では、池の岸の部分は中世より今まであまり変化せずに残っていると考えられてきました。しかし、今回の調査でわかったように、東大池の西岸や西小池の周辺では、中世、近世と時代に応じて庭園の内容が大きく変わっている可能性が高いようです。

「真景図」には西小池の中に３つの島を橋でつないだ構築物が描かれています。この部分は調査区のすぐ西にあると考えられますが、桂離宮庭園にある「天橋立」とその周辺に似ていることが指摘されています。調査区周辺は江戸時代に各地の名所や和歌にちなむ景色を縮小して庭園内に表現する（「縮景」）技法を取り入れ、当時の流行の姿に改変されたようです。

以上の点から、今回の調査区周辺は今までの調査での見解とは異なり、平安時代の寝殿造系庭園から善阿弥のつくった中世の庭園、そして縮景などを用いた近世の庭園へ、さらに最近の姿へと、時代の状況や庭園の流行に影響されて大きく変化したことがわかりました。

南都随一の名園といわれている大乗院庭園の変遷や実際の姿が発掘調査によって明らかにできたことは、日本の庭園の歴史を考える上でとても重要です。今後さらに発掘調査を進め、詳細な庭園のありかたや、適切な保存活用をおこなうてがかりにしてゆきたいと思います。



森蘊氏の復原図

一、　東大池之中に井本在之今目見付之北中島之南西也横板立廻之上古之所為也

森蘊　1959　『中世庭園文化史－大乗院庭園の研究－』　奈文研学報第６冊　奈文研　より